

農村における高齢者のエンパワメントと農の営み

— 学生の体験学習への協力の中で —

福島大学教育学部 鈴木庸裕

はじめに

「田んぼはみんなの広場」、そして「米が人と人をつなぐ」をテーマとして、1996年に、福島市に隣接する飯野町（人口7,000人弱）の青木地区において、学生とともに産声をあげたこの実習（教育実践学実習）も4年目を終える。今では40～50名ほどの学生・院生たちが参加するようになったこの実習も、当初の、「大学でもこうしたことができるのか」という教育学部での異質な「実習」への興味は薄れ、「食と農」「地域との共同体験」「すべてが手作業」という実習内容に学生たちが集まりはじめ、3年続けて参加した者もいる。そこで展開した田植えから収穫祭、そして学生の様々なグループ体験学習を支えてきたのが70代、80代の地域の高齢者によるボランティアである。

農村の高齢化が今日の農業の衰退となってあらわれてきているという論調に出会うことが多い中で、逆に今日的な社会問題である高齢社会化をすでに乗り越えはじめている農村の姿も少なくない。農村に残された高齢者像も若者の農村離れ問題と袂を分かち、元気な高齢者による地域の復活が全国的な流れになりつつある。

また、近年、子どもたちの学校行事への参加協力や総合的学習への運営協力など、農村（地域）における高齢者の出番が地域や子どもたちの学習環境に大きく寄与する事例が増えている。しかしながら、この出番も、高齢者自身の学習主体化というよりも学習提供者としての消費的学習材的位置づけ（利活用の対象）になってしまっていることが少なくない。

他方、高齢社会の中で、高齢者の介助や生き甲斐づくりへの異世代からの働きかけがボランティア活動などとして急増している。これにしても、ややもすると高齢者＝社会的弱者（いたわりの対象という見方を固定化してしまう）といったメッセージを当事者に送り続ける結果となる場合がある。高齢者の、社会的個人的な喪失を前提としたコミュニケーションがはかられてしまっているといえる。

ここでは、学生（青年）たちの体験的実習の学習環境を整備していく過程で聞き取ってきた高齢者の声をもとに、地域における高齢者の主体性や異世代の学習と高齢者の「学習」とのつながりについて述べてみたい。地域の担い手としての高齢者の姿がこの実習のなかでどう映ってきたのか。以下、本実習をとおして学生の学習活動に関わった高齢者にとっての学びとはいかなるものなのかを、地域とともに歩んできた本実習の流れに沿いながら見ていく。

1. 教育実践学実習の概要

1996年にはじまった本実習の概要について、1999年を例にとって示してみると以下のようなになる（青木地区での学外実習部分）。

- 4月30日 学生たちの新しい体制づくりのあと、学生代表など数名による飯野町役場、JA川俣飯野支店、実地指導講師農家への顔合わせ、挨拶と打ち合わせ。
- 5月15日 翌16日の田植え昼食の仕込み。学生たちは「おふかし」や土地で採れた食材による昔ながらの汁物づくりの指導を受ける。
- 16日 田植え 学生院生、青木小学校児童、福島市ダウン症をもつ親の会、役場関係者、地区青年団、地域の高齢者、JA女性部など総勢100名近くになる。
- 6月6日 第1回田の草取り
- 6月27日 保原のりんご果樹農家への摘果ボランティア参加（グループ）、秋にかけてあと4回作業に参加。
- 7月4日 第2回田の草取り終了後、地域農業者メンバーとの懇談会、果樹、酪農など若手農業者との交流。
- 25日 第3回田の草取り
- 9月25日 稲刈り（もち米）
- 10月3日 青木村祭り、御輿をかついで1日かけて

- の行事参加
- 10月8日 稲刈りの昼食の仕込み
 - 9日 稲刈り（粳米）、田植え参加者と同じ規模による。
 - 17日 青木地区民運動会参加（青木小学校）
 - 23日 第1回稲の干しかえ
 - 11月7日 第2回稲の干しかえ
 - 14日 脱穀・もみすり
 - 11月29日 高齢者福祉施設への米の寄贈、デイサービスで昼食用として。
 - 12月11日 収穫祭、地域の高齢者など160名と学生との交流活動。
 - 2月25日 J Aでのみそ造り体験

本論に関わって高齢者との交流は1996年には高齢の農家への稲刈り手伝いボランティア、縄もじり体験、1997年度は炭焼き体験、高齢者福祉施設訪問、1998年度は草鞋づくり体験、イナゴ取りと佃煮づくりなどが一連の米づくりと平行して学生の企画で実施されている。そのほかに、農家の生活や家族、地域、子育て・教育などについて実際に話を聞きとる取り組みが毎年続けられている。

2. 学生にとっての学び

(1) 学生たちの気づきと変化

まず、この実習で学生たちに地域や高齢者との交流からどのような変化や気づきがあったのかをみてみたい。

その1つは、人々とともに生きるということを求める学生が増えているという点である。学生たちはここでの農業体験の楽しさを本当に「楽しい」と表現することが多い。初めて体験する事柄に対する感想であることは言うまでもないが、地域の人々から受け入れられていることがそれを物語っている。これは活動そのものがもっている体験としての楽しさを越えて、学生個人にとって自分の身体と感動が結びついていることを示している。ヌルッとした田植えの時の何気ない泥の感触がその糸口となり、参加学生の誰もが感じる戸惑いと心地よさを共有する瞬間がある。そして学生だけでなく、飯野町の小さな子どもたちからおばあさんやおじいさんまで、幅広い世代の方々との共同作業ゆえに「人と人との間に自分があること」の安心感があるのかもしれない。1ヶ月ぶりにあった地域の高齢者に「〇〇さん、また会ったね」と声をかけられ名前

を覚えてもらっていることに驚きにも似た嬉しきを感じる体験をしている。事実、行事の時々には高齢者から数年前に卒業した学生の話が出ることも多い。「あの学生さんは今どうしているのか。」「最近顔を出してくれたよ」と。学生の中には大学を卒業してからも、「もう1つの故郷」と言って飯野に足を運んだり、勤務する小学校の行事でわら細工づくりをするからと言ってかつて世話になった農家に話を聞きにいく者もいる。

「人と人との出会い」のなかで自分の成長を感じ、その自信を自分に結びつけ、再度、地域や人と人の中に入って新しいものにチャレンジしていく学生たちの姿がある。稲の成長が人間の感覚や感情を豊かにしていく。毎年単調と思われるかもしれない農業がひとりの人間だけでなく、地域の生活の文脈の中でつながっていることが、学生にとっていつからでもどこからでも自分を振り返るステージになっている。農業の教育力には、そこでの諸技術の習得や学習以上に、人（青年）の成長を日常として支援する働きがあると思われる。

2つめは、米づくりを通した様々な体験が学生にとって、「自ら学ぶことの再発見」につなげようとする姿に変化してくることである。もともとこの実習は大学の授業としては、学生から見て「大学でもこんな事ができるのか」という「なんでもあり文化」と切り結ぶところがあったかもしれない。しかし、農の営みというコンセプトには、そもそも個別的で消費・商品化文化に麻痺したわれわれの感覚を協同（労働）と学習から再創造するという視点があった。昔ながらの手作業、無農薬という米づくりは、決して昔を懐かしんだり現実の社会から逃避するようなロマンチズムではない。学生にとっては、知識や技能をため込むという「学習」の発想を一度解き放ち、そこでつくりかえたものを再び大学などでの学習活動に埋め直す作業である。しかも、地域の人的物的資源を活用するという考えではない。自らの学習の環境をにつくりかえるために、地域の人々（支援者）に働きかけていく。そのときにはじめて本物の学びになる。この働きかけの多くが高齢者に向けられている。教えを請う人という意味ではなく、共同作業者である。このことをある学生は「稲を育てることが人と人の願いや喜びをもつないでいく」と表現している。ここには機械化や農薬づけによる昔ながらのカンやコツの喪失や個人的な体力の衰えと後継者のない不安など農村の高齢化に関心と共

感を示す若者の姿がある。

この実習では1年間の米づくりと平行して、学生グループによる自主的活動をすすめているが、この4年間で、農繁期の「稲刈りボランティア」、リンゴの摘果作業、炭焼き、みそ造りなど農村生活そのものに立脚した取り組みがあったり、また、村祭や地区運動会などへの参加や高齢者福祉施設への米寄贈、大学祭への老人会の招待、そして、12月には地域の方々を招き、餅つきと学生の出し物による収穫祭などがある。これらはあらかじめ用意してきたものではなく、田んぼに幾度も通う中で学生たちの興味関心や地域との会話の中で生み出されてきたものである。農業を「3K」の1つと思っていた学生がその大変さだけでなく、食の崩れや環境破壊など今日の農業をめぐる問題の重苦しさとしっくり向き合い、逆にしなやかに楽しく実習や調査・聞き取りを終えていく。これを支えるのが高齢者の知識や工夫、バイタリティである。

(2) 総合的学習の展開と農業体験との関わりの中で

この実習の役割は、学生たちが具体的な体験を通して農業や地域社会への抽象的な認識を組みかえ、再び具体的なアクションと結びつく学習とは何であるのかをともに考えていくことにある。そして、それを発信することである。今日言われる「総合的学習」を先取りしたのではないが、この4年間は教員養成の大学版「総合的学習」の、いわばその土台づくりを行ってきたといえる。学生のレポートから読みとれる農業への関心も、「農村女性と子育て」、「食糧問題と農業」、「国際理解教育から見た農の営み」、「家族農業と生活文化」、「農業体験と教科教育との橋渡し」、「地域福祉とコミュニティケア」、「伝統食と子どもたち」、「農村の産廃問題」など、多岐にわたる。これは1年間の地域体験学習でもって完了するものではない。体験学習的取り組みのバージョンアップをはかる上で、いっそう「心と体を耕しながら知を磨いていく」ことは欠かせない。決して格好良くスマートにいくものではないが、「泥臭さの中に真実が見えてくる」という学生の声に励まされることもしばしばある。稲や土のにおいや日光、風という日常無自覚に接するものが、稲の成長や農作物への影響を媒介として、身近なものとして受け止めていくことができる。それを栽培方法や化学式・統計資料ではなく、人間と自然との具体的な行動（動詞）で提示されていく。

たとえば、どうして草取りを手で行うのか。農家か

ら、第1回の田の草取りの時に泥をかき混ぜるのは、文字通り草を取ることにともな、地中のガスを抜くという作業がある。これは苗の根に悪影響をあたえる有害なガスを抜くことであり、株の間を歩いて回るだけでも大きく稲の成長を助けるなどの指摘がある。

こうした学習は人と人との間にいるからこそ養い得るものである。地域との連携によって特色のある学校づくりと子どもたちの学習とを結びつける「総合的学習」には、その特徴ゆえに継続した地域との連携には困難さがつきまとう。この実習は学校や教室に地域の人的文化的資源を引き寄せる（囲い込む）のではなく、大学（学校）を飛び出して地域に入り込む形態をとっている。そうした場合、学校のスケジュールに地域をあてはめるのではなく、地域の日常や自然環境にわれわれが割り込むことになる。ましてや毎年参加者が増え内容が変化していくと、どこかで地域との摩擦やトラブルが起こる。そうしたとき、トラブルをいかに避けるのかではなく、そのトラブルの解決から何を学ぶのかという視点が大切になる。これは、例えば学級でのいじめ問題や子どもどうしのトラブルがあったときに、それを教師（大人）の手で解決するのではなく、子どもどうしの話し合いや知恵を活かし、その問題からあるべき人間関係のあり方を学んでいくようにする筋道にもあてはまる。「食農教育」をベースとした教育実践にとって、いのちあるものに寄り添う体験は、自然や環境、人々から支えられて自立していくトレーニングなのかもしれない。田んぼの作業をしている間、入れかわりたちかわり顔を出してくれる地域の高齢者はいわば学生への集団的なトレーニングチームだともいえる。

3. 学生との出会いと高齢者

この地域は、中山間地的な地域でありながら、福島市に隣接することから国庫補助等の対象地域ではないが、ため池などの水系をもつ棚田の風景に近い場合は狭い山間に続く地形をもっている。表1に示すように、70～80歳代の人口推移は近隣の市町村よりもその率は高い。また、表2のように専業農家はきわめて少なく、「おらが家で食べる分」という自家用に力点がおかれている。かつては養蚕の盛んな地区であったが、桑畑も果樹関係に転換し酪農などの比重も高くなってきている。そうした中で、本実習の方法論の1つである「昔ながらの手作業での米づくり」が、1970年代初頭までの機械化前の水稻栽培の諸技術に習熟している高

表1 年齢階層別人口

(単位：人)

年次 区分	1980			1985			1990			1995		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
0歳～4歳	305	219	524	219	199	418	174	173	347	165	131	296
5～9	324	290	614	307	228	535	217	193	413	181	178	359
10～14	251	325	576	326	286	612	309	228	537	214	193	407
15～19	286	259	545	215	277	492	290	244	534	272	205	477
20～24	214	236	450	190	193	383	125	202	327	209	181	390
25～29	252	265	517	221	197	418	179	172	351	116	165	281
30～34	303	260	563	248	259	507	212	197	409	163	164	327
35～39	223	230	453	304	260	564	234	241	475	204	189	393
40～44	227	226	453	216	228	444	300	251	551	242	252	494
45～49	293	287	580	214	224	438	211	227	438	300	254	554
50～54	275	294	569	277	279	556	220	226	446	214	219	433
55～59	207	256	463	267	285	552	273	277	550	212	221	443
60～64	164	208	372	202	250	452	259	284	543	260	263	523
65～69	142	210	352	154	200	354	198	243	441	249	271	520
70～74	115	160	275	123	187	310	144	188	332	170	230	400
75～79	76	97	173	88	135	223	101	164	265	119	163	282
80～84	52	63	115	54	79	133	66	111	177	78	130	208
85～89	22	23	45	28	23	51	26	48	74	41	74	115
90～94	2	7	9	10	12	22	11	13	24	9	31	40
95～99	1	1	2	—	2	2	1	5	6	5	5	10
100歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	3,734	3,916	7,650	3,663	3,804	7,467	3,550	3,690	7,240	3,423	3,519	6,942

(国勢調査)

表2 農家の状況

年次	総農家数	専業農家数	兼業農家数			農家率	専業農家率
			総数	第1種兼業	第2種兼業		
1955	899戸	402戸	497戸	382戸	115戸	55.2%	44.7%
1965	843	153	690	459	231	51.2	18.1
1975	776	67	709	274	435	44.6	8.6
1980	733	55	678	214	464	41.3	7.5
1985	692	62	630	112	518	38.9	9.0
1990	648	48	600	75	525	36.7	7.4
1995	598	53	545	63	482	33.8	8.9

(世界農林業センサス・農業センサス)

齢者の出番を呼びおこす。「60歳半ば以上の人しかわからない」といわれる作業である。しかも実習では、その技術面において学生たちに説明できる人という一層年代があがる。昔ながらの野道具の使用方法やその技の意味を正確に伝えることは長年の経験にのみ頼

れるものではない。70年代以降急激に変化してきた水稲栽培の方法技術と地域環境の変化を読みとりながら、日常的な「研究」と弛まない興味に支えられ、あわせて米づくりの自信によって裏付けられている必要がある。

次に、本実習に関わってもらった地域の高齢者の声を要約しながら、高齢者の学びについて述べる。

① 米づくり実地指導講師のAさん（78歳）

「学生さんたちが田んぼに訪れ一緒にいるのは楽しい」というAさんは、本実習の最初から指導・支援と協力をいただいている方である。米づくりの「講釈」ではこの人の右に出るものはいないと、町役場から紹介してもらった方である。日頃から学生たちも自宅に上がり込むなど、ご夫婦で学生たちを受け入れてもらっている。

最初、大学から農業体験をしたいといったときも、多くの地域住民は「農業実習」という理解をする人が多く、「収量がどれくらい出るのか」、「収量が上がるためにAさんが関わっている」と思っていたらしい。隣よりもいかに収量を上げるのか。そういったある意味では農村の競争社会が見え隠れする。しかし、Aさんは、この実習は米づくりを通して教師をめざす学生たちが地域の人々と交流することを目的としており、「地域の様々な人が学生たちの活動に関心を持ち、みんなで協力してはどうか」という提案を先のような考えの人に話し返していくようにされていた。古くからの土地によそ者が出入りし、しかも農業のまねごとのような取り組みに対して無関心な声も珍しくない。そうした部分への「防波堤」として立ち回ってくれたのは、この取り組みが地域の活性化にならかの影響があるのではないかという感触を得られたからだという。もっといえばこの実習での学生や大学との出会いを自分たちの地域としても積極的に受け止め、「活用していく」という発想を持つべきである。このように考えておられたことを伺った。

「自分は小学校しか出ていないが、いま大学の学生さんにもものを教えるとは」という言葉は謙虚な教育者像であるが、わらを束ねて縛る作業や結び方など、手先の不器用さをもつ青年の発達課題など、的確に指摘されることが多い。稲を干す杭の立て方などを教わるときに、基本的な形を教えながらも学生個人個人が自分に合った方法を発見するように声をかけてくださる。「米づくりの作業にはどこをとっても自分流の発見があり、自分で工夫改良する楽しさがある」という。実習の時に、その準備や実習後の学生の活動の広がりを意識しながら、事前にいろいろな地域の人的資源を紹介してもらったり調整をしてもらったり、さまざまな情報とネットを提供してもらっている。

② 米づくり実地指導講師のBさん（83歳）

もう一人のBさん（田んぼの所有者の父親）は、小柄ながら80歳を過ぎ、ほ場を日常的に管理していただいている方である。

昨年、学生の自主的体験活動の中に「草鞋づくりグループ」があった。藁で草鞋をつくりたいという学生の希望に応えようと、50年ほど前につくっていた若い頃の経験と記憶を思い出すために、新しめの草鞋を地域の商店でもらい受け、それを分解しいろいろと確かめ、昔のカンやコツを取り戻してから学生に教えるという準備をもらった。そのためにあちらこちらを尋ね歩いたことを後日談として伺った。また、今年は幾度か体調を崩されながらも丹念に学生指導と田んぼのコンディションづくりにあたっていた。また、今年はいくつかの経験と記憶を思い出すために、新しめの草鞋を地域の商店でもらい受け、それを分解しいろいろと確かめ、昔のカンやコツを取り戻してから学生に教えるという準備をもらった。そのためにあちらこちらを尋ね歩いたことを後日談として伺った。また、今年は幾度か体調を崩されながらも丹念に学生指導と田んぼのコンディションづくりにあたっていた。

Aさんも同じであるが、Bさんからはよく自らの戦争体験を聞くことが多くあった。というよりも話の枕である。そのことがBさんの自己形成に大きく影響を与えているからである。中国大陸で敗戦を迎え、シベリア抑留体験やその4年間の間にウラジオストックなどの工業で労役を受けてきた体験、そしてロシアでの生活で感じた国民性や日本人観など単に痛ましい戦争の傷跡を若者に語るというものでなく、そのことから青年が何を考えるべきかを問いかけているように聞かれる。

また、第2次世界大戦が東北の農業にいかなる影響を与えてきたのか、つまり、働き盛りの人間が数多く戦地にとられることによって農業者の不足以上に、後年の農業技術の伝承に大きなマイナスになったこと。Bさんの話からすると、戦後、高度経済成長によって東北の地力が都市部に吸い上げられていったことと青年の人口移動、農業離れを加速させる誘因に気づかされる。

ともにご夫婦でよき学生へのアドバイザーであるとともに、季節ごとに家でできた野菜を学生たちに持たせてくださったり、家に上がって伝統的な料理を振る舞っていただいたり、「贈与」の文化ともいえる人と人との絆を縦横に織りなしていただく立場であった。なによりも夫婦一緒に話を聞きながら絶妙な会話の絡みや農村での男女の共同など進歩的な姿を感じ取ることができた。

③ 炭焼き指導のCさん（84歳）

Cさんは、田んぼの近くで炭焼きをやっておられ、一昨年前に炭焼き体験を行ったときの「講師」である。

雪の降る中での炭焼き指導のときCさんは以下のように答えてくれた。

「われらは戦時中、お国のためにということで教育を受けてきた。学校の先生のいうことは絶対だったんだよ。みんなもわかるように、戦後それが間違いだった。今日、炭焼きについてみんなに教えているけど先生になるみんなに間違っただけを教えるわけにはいかない。教師が間違えたとそのまま子どもに教えることになる。炭焼きはこれまでの長年の経験やカン、コツでやっているようなものだから炭焼きの技術や炭になる原理について、自分の努力で学習をして、しっかりつかんでほしい。勉強というのはそういうものでしょう。」

自宅下の田んぼでの作業中もよく顔を出していただき、「また炭焼きをするかね」と学生への好奇心を駆り立てる発言をしてもらうことがある。木を切り倒し鋸を引いて炭焼きに適した材木づくりから炭の持つ効用について細かく説明していただく中で、地域の農業者がかつては農耕だけでなく、日常生活にとって必要な炭焼きなどの営みまでマルチに取り組んでいた様子を聞き取ることができる。農業がもっている人間の食の生産と生活の豊かさをつなぐ多面性が失われてきた経緯をつかみ取ることができる。

学生に対して、コンビニでの消費に見られるような「モノと人間との間に介在すべき文化の喪失」を訴えている。それが人間の学習行為に大きな影響を与えているという指摘は、もっとも示唆的である。

④ 高齢者と高齢者をつなぐキーパーソンのDさん

DさんはJAの仕事の傍ら、大きな行事ごとの食事づくりで学生への指導をいただいている方である。収穫祭の時に、体の不自由な高齢者からの「参加したいけどどうすればいいのか」とう声を代弁して、役場からマイクロバスを出してもらい地区内を巡回することになった糸口をつくることができた。大学祭に老人クラブの方が行ってみたいという声を組織して実現したりと、まさに高齢者どうしをつなぐキーパーソンの役割を持っている。地域からの人望も厚く、本実習への指摘や改善点などをはっきり表現してもらうことも多い。Dさんの姿は、農村共同体がもつ複雑な人間関係や習慣・風習をつねにプラス要因に組み替える作業であり、地域と実習・学生集団との中間的組織の1つを担っている。

学生がこの数年参加する味噌づくりもこの方の発案

で、地域の女性の出番と地域の食材を活かした（無農薬の大豆）味噌づくりはJA女性部の原動力となっていてきている。

高齢者が出番や活動を1回きりのものにするのではなく、いろいろな活動に間接的にでも参加するあるいは期待や要望があるという機会を意図している。実習で年間に一度だけ出会うのではなく、収穫祭では大きな釜や臼を借りに学生たちが立ち寄る。こうした情報をつかんでいることとともに、関係の継続という視点と行動に、多くの学生が学ばせてもらった。

⑤ その他の高齢者から

イナゴ取りと佃煮づくりの中で、丁寧に作り方を学生たちに教えていただいたEさんやわらもじり、縄ない体験で学生や小学生を指導していただいた老人クラブの方々、高齢者のデイケア施設への訪問の際に、昔の遊びや生活の様子を教授いただいた方々など数多くの「講師」がいる。多くの場合、学生の都合で突然押し掛けて話を聞いたり一緒に作業したりと迷惑のかけどおしであった。しかしながら、話を聞かしてほしい、あるいはあることがらを教えてほしいという姿に高齢者が出会う中で、「自分たちの知っていることしかできないよ」と言いつつも、一方で、何をこそつかんでほしいのかを要求する発言も多い。自分の家族や地域の若者からはあまり関心を示されず自分個人の活動や思い出になりつつあることがらに対して、関心をもって共感しながらより添おうとするものとの出会いは、自らの新たな生き甲斐に変容する。

その他にも、収穫祭に大勢の方が詰めかける高齢者の方々を拝見していると、学生が招待している面もあるが、学生たちと一緒に収穫の喜びを祝おうとする姿がある。自分たちの子どもでさえも見向きをしない農業に、若い人たちががんばっていることへのいたわりだけではなく、収穫祭に参加することで学生たちを支えていくことになる。「大勢の人が収穫祭にきてくれることがまた来年の実習の励みになるでしょう」と話してくれる方もいる。12月の第2土曜日が学生たちによる収穫祭として地域の定例行事になりつつあるのは、地域住民の交流の場を地域住民としてもり立てようとする意識が働いている。「また来年もよろしくね」といいながら家路につくあるおばあさんは、孫のような学生の努力をたたえにきてくれたといった印象的である。

4. 高齢者のエンパワメントと学習

(1) 地域の中にコミュニティをつくる

ここでは高齢者のボランティアが高齢者自身のエンパワメントになり、それが学習活動として位置づけるのではないかという視点をもっている。この点について、まず、高齢者が地域の中に地域（コミュニティ）をつくっていくという営みに注目する必要がある。この実習で「田んぼはみんなの広場」と呼ぶのは、実は学生たち（その学生がボランティア活動でつながる障害者グループの人たちや施設の子どもたちなども含めて）という、いってみれば「よそ者」がやってきて、農村の土地に異質な生活文化を持ち込むばかりか、そのことと旧来の農村文化とがどう共生していくかを考えるためである。地域の人々の暮らしに「よそ者」が分け入ることによって、数十年顔を合わせてきた地元の人々どうしの新たな出会いがある。「本当に学生さんは好き勝手言うなあ」と言いつつも、学生が農村で体験したいという様々な要望を実現しようと奔走していた時、今までになかった地元の方々のつながりができていく様子もうかがえる。

われわれのような「にわか百姓」では、本当の農業の苦労や大切さに行き届かないことは重々承知の上であるが、青年層が農村から少なくなる中で、20歳前後の若者が地域を出入りすることで、小中学生とその親の世代、あるいは高齢者の世代とのつながりも生まれてきている。実習の初年度、参加してくれた時に小中学生だった地元の子どもたちも高校生、大学生になっている。地域行事を敬遠したがるこうした世代が、学生たちとともに村祭の御輿を担ぐ姿も増えてきた。そ

のようすが地域の高齢者をエンパワーする。

(2) 無力化へのエンパワメント

そして、「聞くこと」が高齢者の眠っていた知識を引き出すということも言えるが、当事者の生活文脈の中で話を聞くことによって、眠っていた意欲が活性化される。このスタイルが高齢者の学びを多面的に支えることになる。しかも、高齢者が学生たちと何をやりたのかを導き出していく過程となる。農家に訪れて個人の経験を伺うことは、そこで学生が高齢者の経験に関心をもつことのみならずスピーク・アウトを学生が声にする、つまり代弁することになる。

高齢者にとって無力化の内面化は当事者の問題解決の機会を妨げられる経験によってより進行する。したがって、学習によって習得してきた事柄を学習によって取り返していくことが必要になる。この実習の中では高齢者の生涯学習が他世代の学習を結びつけたときに達成されたと言える。自己の体力や能力の低下が農耕放棄と結びつくという発想ではなくあらたな選択の機会であると見る必要がある。高齢者の新しいステージづくりが「農業には定年がない」という農業者の居場所となり、地域の活性化と結びついていくこと。ここに、高齢者の学びを再考する観点がある。

注 記

筆者自らの聞き取り調査（1998年4月から1999年12月）と学生たちの活動報告から読みとった高齢者の姿をもとに執筆した。実習そのもの並びにお話を伺った方々に、文末ながら謝辞を申し上げます。

Empowerment of the Person of Advanced Age in a Rural District and Nou no Itonami
— Into the Cooperation for Students Experiences Learning —

SUZUKI nobuhiro